

「馬場小室山遺跡フォーラム」第75回ワークショップ

【 原動力！パブリック・アーケオロジー2016 】

馬場小室山遺跡のパブリック・アーケオロジーからみえてきた現代社会との「かわい」と未来への新たな挑戦

馬場小室山遺跡研究の新展開では限界(知識・経験・思考・領域等)からの知的解放を目指します！

＜馬場小室山遺跡研究の新展開—縄文塚(「環提土塚」集落)の遠隔生業往還と広域流通社会からの大転換とは？—＞

新展開1	「ムロさま」の「限界領域」打破	馬場小室山遺跡「第51号土壌」から展望する縄文時代晩期以降の葬墓式と土器社会論—「ムロさま」の「累積型改新土坑墓」から探る「追葬型再葬壺棺墓」への途— (ムロ1)寺野東遺跡の「積葬墓」(SX036埋設土器遺構)に注目 (ムロ2)泉坂下人面イデオロギーの拡散ネットワーク (ムロ3)青森県の「再葬壺棺墓」／列島晩期の再葬動向／ 「金田一型土器棺墓」／土井ヶ浜遺跡の「弥生再葬墓」
新展開2	「オムちゃん」の「限界知識」打破	中空土偶から容器形土偶という土偶の「台式」化への社会的意義 (オム1予告)晩期の人面文土器を契機・原型とした「台式」化
新展開3	「シオ(塩)もん」の「限界経験」打破	「製塩土器」形成から製塩遺跡の操業へ、爆発的普及の晩期社会 (シオ1)定住制社会から生業往還としての製塩遺跡へアプローチ (シオ2)アマモやヨシ(アシ)の「草木灰」は濃縮工程での使用か？
新展開4	「タマきみ(君)」の「限界思考」打破	ヒスイ製勾玉・小玉の晩期流通(関東各地域拠点でも製作)と弥生時代中期中葉「再葬壺棺墓」への流通実態(上越周辺北信経由)解明 (タマ1)熊谷市飯塚南遺跡の土壌出土ヒスイ製勾玉と飯塚遺跡群

1. 【「ムロさま」研究からの問いかけ(4)】：「ムロさま」の「累積型改新土坑墓」から探る「追葬型再葬壺棺墓」への途

1-1. 再葬墓研究の原点：縄文時代／弥生時代から民俗例までを視野に入れた学史的総合研究に学ぶ

【論文】斎藤 忠(1977)「日本における再葬(洗骨葬)の展開」『大正大学研究紀要』第63輯

★杉原荘介の所謂「再葬墓」論議が次の世代に移行するタイミングに纏められた総説で、再葬は縄文時代の特徴であることを明示した基本文献です。

【概説】斎藤 忠(1982)『日本考古学概論』、吉川弘文館

★縄文時代と弥生時代の葬墓式全体の中で再葬墓を位置づけ、先の論文以後の所謂「再葬墓」にも言及。特に大陸との関係にも目配りし、『魏志』の「東沃沮伝」に注目しました。この観点による大陸からの影響としては、「弥生再葬墓」とした土井ヶ浜遺跡の再葬土坑墓が弥生時代前期末まで遡及する可能性を否定できません。

1-2. 縄文時代後晩期葬墓式の分類視点：関東周辺の弥生式限定分類から本来の葬墓式分類へ！

【葬式(遺骸処理風習)】の視点：一次葬(伸展葬／屈葬など)、合葬、追葬、小金井良精の「重葬」(「重葬」の土器棺墓への発展形態として寺野東遺跡を典型とし、馬場小室山遺跡でも確認した「積葬墓」)、再葬(洗骨葬／改葬／複葬など)、「人骨集積」、「ムロさま」の「累積型改新土坑墓」など。
なお、再葬土器棺墓などにも追葬型再葬と合葬型再葬が見られることに注意しましょう。

【墓式(埋葬施設)】の視点：石棺墓／木棺墓／甕棺墓／土器棺墓／壺棺墓／配石墓／土坑墓(土壌)／廃屋墓等

更に夫々が下位分類を有し、土器／壺棺墓では、集合(並列・房状)／集積(重積状)の有無や、合口の有無に加えて土器／壺棺の正位／横位の埋置作法など。

【式次第】の視点：副葬品／赤色顔料撒布など

【埋葬群(墓域の空間配置)構成】の視点：円環状構成、列状構成、房状構成、集房状構成など

1-3. 縄文時代後晩期葬墓式の命名法の現在：「葬式」を形容する「墓式」を以て命名の基本とする。

・杉原荘介の弥生式中期前葉から中葉にかけての所謂「再葬墓」は、「再葬壺棺墓」あるいは「再葬土器棺墓」と呼びたい。前回解説しました土井ヶ浜遺跡の「弥生再葬墓」は「再葬土坑墓」となります。
・杉原の研究を補うように鈴木が1985年から1990年代にかけて進めた「荒海式」の葬墓式研究を紹介しますと、土器棺を合口にした風習に注目したもので、関東に留まることなく、東日本の縄紋式晩期終末から弥生式前期にかけて席卷する「正位合口土器棺墓」や「正位合口壺棺墓」へと展開しました。他方で東海以西の特徴となる「横位合口壺棺墓」は共通の母体からの対峙する埋置風習で、その収束が所謂「再葬墓」になります。このように再葬を前提としている場合には、再葬を省略する場合があります。

- ・合口の組み合わせ作法を分析する場合は「**金田一型土器棺墓**」のように具体的な標本名を特定します。「土器社会論」を展開する場合に必至ですが、所謂「再葬墓」研究は土器の研究を疎かにする傾向が見られ、埋葬を執行する集団関係（風習の伝統性や外来性、新規性など）に未だ議論が遠く及ばないのが現状です。この点に齋藤忠の墳墓考古学の最大の弱点を見、杉原莊介以下今日に至ります。
- ・学史的な小金井良精の「**重葬**」、馬場小室山遺跡の研究から新たに命名した寺野東遺跡「SX036埋設土器遺構」の「**積葬墓**」、第51号土坑の「**累積型改新土坑墓**」は年代的複合を示す現象のため、本来は「埋葬群構成」の特殊な形態とするのが相応しいかもしれません。

1-4.「**積葬墓**」から縄文人と弥生人の関係に接近！—両時代を跨ぐ葬墓式関係は何を意味するか？—

- ・所謂「再葬墓」研究は考古学の基礎となる層位についての研究が疎かにされ、土坑墓ゆえに一括同時埋納を前提に理解されるのが一般的です。しかしながら、馬場小室山遺跡第51号土坑が明らかにしたように実際は何度も掘り返しが行われたり、寺野東遺跡「SX036埋設土器遺構」のように「**積葬墓**」として同じ土坑が垂直的に更に2回重ねられる例が認められるなど、多種多様な取り扱いが想定されます。
- ・そこで、今回は**縄文時代晩期末の土器棺の上に弥生時代前期の土器棺が垂直的に層位差を以て重なる土坑**について検討しましょう。縄文時代から弥生時代への移行を風習として顕著に示す現象です。阿武隈川上流域、福島県石川町鳥内遺跡は縄文時代晩期後葉から弥生時代中期前葉の土器棺墓に特徴がみられる墓域を空間的に構成しています。当該墓域は晩期後葉の単独の土器棺墓から開始されますが、後葉から末葉の土器棺は極めて少なく、弥生時代前期から中期前葉において盛行します。問題の土器棺墓は「**21号土坑**」に見出されましたが、「**大洞 A'式**」期の土器棺の上層に「**御代田式**」の土器棺が検出されています。この状況は異様で、縄文時代の埋葬風習が弥生時代前期になっても継承されていることを示しており、**鳥内遺跡においては時代が変わっても変わらぬ墓所を選定し、変わらぬ葬式を継続しており、時代区分の転換と葬墓式区分は一致しない**ということです。
- ・従って、関東地方における葬墓式の画期は中期初頭「**岩櫃山式**」の「再葬壺棺墓」に観る立場を強調するとともに、その形成母体も見抜く必要があり、次回に具体的な資料と共に解説したいと思う。

2.【「シオ(塩)もん」研究からの問いかけ(3)】：アママやヨシ(アシ)の「水草焼き」と製塩遺跡の燃料問題

- ・前回も触れましたが、「**製塩遺跡**」には大量の灰が捨てられている**捨灰遺構**があります。土器製塩には大量の燃料が必要とされることが前提となりますが、この問題はあまり吟味されないようです。**塩分の多い潮風に強い草木が大量に存在する印象風土は近世のこと**ですので、縄文時代には燃料の確保が重要な問題となることは間違いありません。「草灰」と捨灰遺構の関係からは、**土器製塩と燃料調達の関係の中でヨシ(アシ)やアママの乾燥利用を考えることが肝要に**思われます。
- ・製塩遺跡には**2種の操業タイプ**があります。複数型式の**長期継続型**は霞ヶ浦沿岸(浮島と古古渡湾)に、**短期継続型**は松島湾沿岸の50ヶ所の製塩遺跡で展開、**両地域は盛期の年代が交差することなく操業**。

3.【第4回「山田湾まるごとスクール」(9/3-5)】の記録集準備中：被災者の言葉こそが防災・減災だ！

- ・「あれから5年」の新たな局面を迎え、復興に向けたパブリック・アーケオロジーの在り方を含め、私たちならではの被災地復興支援として、更なる交流を進めることにしました。即ち、山田史談会とは、『**山田町史 上巻**』に学ぶ、という姿勢を継続し、船越半島の大浦仮設住宅の方々とは、『**大網**』に学ぶ、という新たなテーマで取り組み、さらに**北浜老人クラブ『浜よ、ふたたび—私たちは忘れない—』**に学ぶ、という今年度からの企画を加え、**パブリック・アーケオロジーとしての「防災・減災考古学」**を推進目標とします。
- ・10/16(日)の事務局会打ち合わせでは感想文提出未了の方がおられ、フォロー開始。**真の狙いは被災者に寄り添う感性や倫理から、被災地の未来を照射する理念と知性の発現を導くマネジメント**にあります。

4.【馬場小室山遺跡deインスレーション】：「遺跡の風景がある街づくり」の視点から馬場小室山遺跡を考える！

- ・5/4(みどりの日)は県史跡・馬場小室山遺跡を清掃する日として10年以上「**クリーンアップ大作戦！**」を継続してきました。そうした活動や史跡としての管理が功を奏し、課題は清掃から活用へと新たなステージに移行しました。それに相応しくあるべく、今年からの抱負を以下のように明示しました。

- ・第32次発掘調査地点(アイダ村)を百年後には馬場小室山遺跡専用の資料展示館にしましょう！
→ そのためには、(1)第32次調査報告書の資料を活用してアイダ村の展示構成を策定しましょう。
(2)パブリック・アーケオロジーによる学校教育と生涯教育への貢献を提案しましょう。

- ・「**清掃から活用へ**」というテーマで立入禁止の馬場小室山遺跡は一体何ができるか？
「さいたまトリエンナーレ」の内覧会で井山絃文画伯に現代美術について解説頂いた折に聞いたのが、「馬場小室山遺跡deインスレーション」という活用法です。みなさん、救済した土器の活用が浮かびませんか？

5.【その他】：情報交換会(ワイン・アーケオロジー)での話題など

- ・「**香取文書に見る平安時代末の印旛地域の製塩**」という理解についての意見交換。
- ・さいたま市立博物館では『第40回特別展 真福寺貝塚』(～11/20)。現在、真福寺貝塚は整備事業として確認調査中。現地説明会が**11/5(土) 10時～、14時～**の2回予定されます。駐車場はありません。
- ・次回の**第76回ワークショップ**は市民向けの「**秋の収穫祭**」として**11/27(日)**(於：**桜環境センター**)に実施します。野外調査研究会さいたま支部の高原勇夫さんと隣同士のコーナーでコラボします。

以上